

5) 増田翼「保育の原理はなぜ伝わらないのか～遊びよりも勉強・習い事を重視する風潮にどう向き合うか～」日本保育者養成教育学会第4回研究大会、福山市立大学、2020年3月1日

PA114 保育の原理はなぜ伝わらないのか

～遊びよりも勉強・習い事を重視する風潮にどう向き合うか～

増田 翼 (仁愛女子短期大学)

日本保育者養成教育学会 第4回研究大会 in 福山市立大学
令和2年3月1日(日)
13:00~15:00

問題の背景

「勉強や習い事を重視してほしい」といった親側のニーズを受けた結果、
「通っている園が遊び重視でない場合」もある
NHK「すくすく子育て：意外と知らない!? 保育園・幼稚園」2017年6月放送、<https://www.nhk.or.jp/sukusuku/p2017/698.html#q4>

住田正樹ら(2013)：熊本・徳島の幼稚園・保育所計6園を対象とした調査
在園児の約6割が「習い事・お稽古事を利用して」おり
「特に学習系に関しては幼稚園児・保育園児ともに利用が多くみられた」
住田正樹・山瀬範子・片桐真弓「保護者の保育ニーズに関する研究」『放送大学研究年報』第30号、2013年3月、25-30頁

幼稚園・保育園への要望
「知的教育を増やしてほしい」 「保育終了後におけることをやってほしい」
34.8% → 51.6% (2000年) (2015年) 28.4% → 44.1% (2000年) (2015年)
「第5回幼児の生活アンケート」
ベネッセ教育総合研究所(2016年)
首都圏の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者対象(4,034名)
https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/jisedai/research/yoji-anq_5/YOJI_chp2_P36_58.pdf

通常の保育時間の活動実態 (私立幼稚園、私営認定こども園)
「体操」は7割以上の園で実施
「英語」は6割強の園で実施
「音楽活動」は6割の園で実施
「ひらがなの読み・書きの練習」は5割強の園で実施
「第3回幼児教育・保育についての基本調査」
ベネッセ教育総合研究所(2019年)
幼稚園・保育所・認定こども園の園長等対象(日本国内全域4,565園)
https://berd.benesse.jp/up_images/research/All_web.pdf

研究課題
●なぜ保護者は「遊び」とともに、あるいは「遊び」よりも「勉強・習い事」を重視するのか?
●「学習面を切り取って学ば」なくても、(勉強・習い事を優先し)なくても、「幼稚園や保育所の生活の中で」(遊びを通して)「子どもたちは実に多様な経験ををする」
ということが保護者に伝わらぬのはなぜなのか?

保育の原理が伝わらない理由

◇方法の不明確性
日本においては、小中学校教師に比べて「幼稚園・保育所でうまく教えることは、ある種の独特な技術と視点が求められる」
なぜなら、諸外国に比べて「日本のカリキュラムガイドラインは教授法の詳細には触れていない」ために「日本の幼稚園・保育所のクラスは、特に「構造が不明確」」だから
林安希子『幼児教育のエスノグラフィ―日本文化・社会のなかで育ちゆく子どもたち』明石書店、2019年

・子ども中心主義に基づき自発的な「遊び」を通して学びを深めていく、という原理の重要性については、歴史的ななかで無数に議論され続けており、保育に携わる者からすれば基本的事項
しかし
・「遊びを通した保育」や「環境構成」という方法論は、保育の門外漢からすれば分かりづらい
・保育の原理は、保育に無縁な大多数の人々には理解し難いという事実を忘れてはならない

◇「保育」を説明するという難題
保育関係者は 子どもの「今」を読み取るようとする職能集団
子どもがどうなるかは未知数であるから「可能性」を数多く蓄えておきたい
将来後悔しないように、早いうちから出来ることを増やしておきたい
保護者は あくまで子どもの「将来」を見ている存在
△GAP
こうした保護者が、外から眺めるだけでは「構造が不明確」な「遊びを通した保育」をすんなりと理解できるわけではない
「遊びを通した保育」の重要性を保育者側から分かりやすく伝えてもらっていないのだとすれば、有用で優位に映る「勉強・習い事」が優先されるのは当然
「遊び」の重要性をいかに分かりやすく保護者に説明できるか、という保育者側の力量も問われる時代になってきた

「遊びを通して」の保育が、見えにくい、理解されにくい現状が課題として話題となる
→保護者から見ると園は「ブラックボックス」であり、可視化する必要があると強く求められている
岩田恵子・大豆生田啓友「保育の可視化へのプロセス」『玉川大学学術研究所紀要』第24号、2019年3月、1-13頁

どのようにすれば伝わるのか

◇エベレット・ロジャーズ『イノベーションの普及』(2007)
既知ではない新しい概念を受け入れるかどうかの選択場面において、人々は次の5つの属性が満たされているほど速やかに新たなものを採用する
①相対的優位性、②両立可能性、③簡潔性、④試行可能性、⑤観察可能性
エベレット・ロジャーズ著、三藤利雄訳『イノベーションの普及』翔泳社、2007年
——この枠組みを援用すれば、以下のような状況をつくり出すことが保育の原理の伝達にとって有意義であると示唆されよう

- ①相対的優位性：遊んでいた方が将来的に得**
「勉強・習い事」よりも「遊び」を重視した方が「将来的」に優位である、と証明することは不可能に近い。ただし、『幼児教育の経済学』(ジェームズ・J・ヘックマン)をはじめとして、幼少期の保育(就学前教育)の質が、その後の人生において重要となる点については、昨今、注目が集まっている。こうした意味で、すべての子どもが「自分から楽しんで」取り組める「遊び」を保育の「中心的方法」に据えることは、少なくとも「マイナス」にはならないだろう。
- ②両立可能性：「遊び=学び」をどう見せるか**
たとえば、「遊びの中の学び」といったフレーズは、2000年代に入ってから、盛んに使われるようになった「言説」である。「遊び」=「子どもの自主的活動」という捉え方にとどまるのではなく、「遊びを通してあらゆることの基礎を「学んでいる」という捉え方が「最近になって先鋭化してきたこと」の背景には、こうした「遊び」の重要性を伝えやすしたい、という普及を目論む意図が見え隠れしているといえよう。
- ③簡潔性：保育の原理の意味をパッと理解できる**
この点が、おそらく一番困難であろう。一般の保護者にも、「遊びを通した保育」「環境構成」といった理論の要点が理解できるように、たとえば比喩なども多用しながら、分かりやすく伝える、という特殊な技術が必要となる。保護者対象説明会などの場を活用しながら、理解を促せるような伝達内容・方法の開発が求められる。
- ④試行可能性：実際、遊びを通して「学んでいる」が一目瞭然**
「保育における評価」が重要視されるのは、保育者が子どもの遊びを捉えながら、今ここで何が起きているのか=どんな学びが生まれているのか、を把握することが求められる時代になったからである。生じた学びを保護者にその都度伝えていくことで、「だから遊びは大切なんだ」と保護者自身に気づいてもらうことが大切だといえる。
- ⑤観察可能性：上記①～④をいつでも目で確認できる**
保育参観の場を利用したり、最近では園の「ブログ」や「ドキュメンテーション」なども活用しながら、極力、保育を可視化する動きが進んでいる。その際には、常に、上記①～④の内容が保護者に届くように、ときには写真や動画も駆使しながら工夫することが重要であろう。